

漢方の不思議

《84》



炭本隆宏（大分大
病院薬剤部薬剤主
任、由布市）

今回は「漢方薬と科学」をテーマに、関連性がないと思われるこの二つの関係について紹介します。

多くの西洋薬は、単一の成分から作られており、抗薬や降圧薬など基本的に一つの疾患に対して効果を発揮します。一方、漢方薬は複数の生薬を混ぜて煎じるといった工程から作られているため、さまざまなる有効成分（効能効果）があり、

多様な症状に効果を発揮するという特徴があります。その有効成分は、数えきれないほどあり、現在も解明されていない漢方薬は多く存在します。

そのような中、大建中湯は科学的にその薬理作用（薬物が体に及ぼす作用）の解析が進んでいる漢方薬

の一つです。大建中湯は、乾姜、人參、山椒、膠飴の四つの生薬から構成されています。乾姜は湯通しか蒸して乾燥させたシヨウガ、人參は高麗人參、山椒は香



辛料、膠飴はデンプンに処理を施した麦芽糖で、いずれも食品として使用されているものです。

元々、おなか冷えて痛んだり、腹部膨満感があっ

れてきました。その結果、大建中湯には、腸の運動を促したり、血流を増やしたりする作用や、炎症を抑える作用があることが分かり、主要な成分についても判明しています。さらに、国内外の多くの施設で安全性や有効性を調べる臨床試験が実施されており、効果についてエビデンス（根拠となる情報）が得られています。

これまで、経験的に症状が良くなるため使用されてきた漢方薬について、その根拠となるデータが現代の科学によって解明されつつあります。漢方薬には、西洋薬にはない魅力がまだまだたくさんあります。

科学で「薬理作用」を解析

（企画・監修 西田欣広
・日本東洋医学会大分県部
会会長）